

2015年5月3日主日礼拝

説教「怪力サムソン」  
士師記 16章 4-22節

【旅の三原則】

私たちの神さまは、旅する神さまです。偶像は旅をしません。どこかに置かれたらそのままそこにあります。けれども神さまは、イスラエルを導いて旅をする神さま。神さまといっしょにしようとするなら、私たちも旅をする必要があります。旅する神の旅する民には、心得ておくべき三つのことがあります。

第一に、旅人は身軽であることです。自分の人生の時間も、持ち物も、みな神さまからお預かりしたものです。私たちはそれらのよき管理者であることを求められています。神さまがお求めになるなら、すぐに手放せるように軽く握っておくことです。

第二に、旅人は目的地をめざします。旅は単なる放浪ではありません。神さまには目的があります。それは世界の贖いです。この世界に住む人々を救い、またこの世界全体を回復させることを目指すのです。

第三に、私たちはひとりで旅をすることはできません。仲間と共に旅をするのです。

【ナジル人サムソン】

サムソンはナジル人として、旅を始めました。ナジル人とは、神さまのためにささげられた者で、神さまの御用を果たすために、酒を飲まず、

髪を伸ばし、死体に近づくことを禁じられていました。サムソンの旅の始まりはよいものでした。14章のペリシテ人の娘との結婚も、神さまのご計画によるものであり、その結果サムソンがアシュケロンの住人 30 人を打ち殺したことも、ペリシテ人たちを震え上がらせる神さまのご計画であったようです。

ところがサムソンは、自分の妻をあきらめられず、拒絶されるとペリシテ人の畑を焼き払います。15章のこのできごとには、「主の霊がサムソンに降った」という表現がありません。ですから神さまの望まれたことではなく、サムソンの思いから出たことでした。サムソンは旅人の第一と第二の原則を破ったのでした。自分の元妻に執着し、個人的な復讐を行って神さまの目的からそれてしまいました。このことは恐ろしい結果を招きます。ペリシテ人たちに妻とその父は焼き殺されてしまったのです。さらにサムソンは、生涯を通してひとりで戦いました。サムソンによき指導者やほんとうの友がいたならと思いますが、サムソンはそういった人々を寄せ付けなかったのでしょうか。こうして、サムソンは、旅の三原則をすべて破ってしまいました。

【サムソンとデリラ】

やがてサムソンは、デリラを愛し、またも執着します。デリラがペリシテ人に自分を売ろうとしていることはよく分かっていたのに、自分

の使命を手放してしまうのです。「【主】が自分から去られた」(20)とあります。でも実際は、サムソンが神さまを捨てたのでした。神さまといっしょに歩くことをやめてしまったのです。

【サムソンの祈り】

目を奪われ、見世物にされたサムソン。しかし、その生涯の終わりにサムソンは祈りました。それは、自分の二つの目のために、もう一度ペリシテ人に復讐したい、という身勝手な祈りでした。けれども、神さまはこの祈りを聞いてくださり、サムソンは信仰者として死ぬことができました。「ヘブル人への手紙」でサムソンは、ダビデやサムエル、預言者たちと並んで、信仰の勇士に加えられています。神さまは、ほんとうにあわれみ深いお方なのです。

サムソンの物語の最初には、印象深いみ言葉が記されています。父マノアに名前を訊かれた御使いが「なぜ、あなたはそれを聞こうとするのか。わたしの名は不思議という」(13:18)と答えるのです。神さまの御使いの名は「不思議」。御使いを送った神さまも不思議なお方。サムソンの物語を通して、神さまは不思議な忍耐深い愛を注ぐお方であられ、ふさわしくない者をも用いてくださるお方でした。今も神さまは、私たちを導いて、不思議な、心躍る旅へと導いてくださるお方です。この不思議な神さまとともに、身軽に、目的を目指して、仲間と共に、旅を続けようではありませんか。